

昨年逝去された佐藤菊正先生の功績をたたえ特集記事を企画しました。

佐藤菊正先生のご略歴と業績



横浜国立大学名誉教授佐藤菊正先生が平成 22 年 9 月 30 日に亡くなりました。享年 85 歳でした。今年以上に厳しい夏の猛暑が峠を越したとはいえ、まだまだ涼しさにはほど遠い残暑の時でした。そして 10 月 5 日に、ご自宅にほど近い妙蓮寺齋場において葬儀・告別式が執り行われ、先生のご遺徳を偲んで、大勢の大学関係者、学園関係者、財団法人関係者、同窓会員、門下生の方々が参集され、しめやかな内にも温かく先生をお送り申し上げました。あれからもう 1 年が経ちます。先生の足跡と業績をたどり、在りし日を思い出して深く哀悼の意を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生のご略歴

大正 13 年 11 月 13 日 横浜市神奈川区白幡仲町に生まれる。

昭和 17 年 3 月 神奈川県立横浜第一中学校（現県立希望ヶ丘高等学校）卒業
昭和 19 年 9 月 横浜高等工業学校応用化学科卒業
昭和 22 年 9 月 東京工業大学染料化学科卒業
昭和 24 年 10 月 東京工業大学大学院特別研究生（前期）修了
昭和 25 年 5 月 同上特別研究生（後期）中退
昭和 25 年 5 月 横浜国立大学助手（工学部応用化学科）
昭和 26 年 4 月 同上 助教授（同上）
昭和 33 年 10 月 工学博士の学位取得（東京工業大

学）
昭和 42 年 4 月 横浜国立大学教授（工学部応用化学科）
昭和 56 年 4 月 横浜国立大学評議員（～昭和 63 年 3 月）
昭和 63 年 4 月 横浜国立大学工学部長・大学院工学研究科長
平成 2 年 3 月 横浜国立大学定年退官
平成 2 年 4 月 横浜国立大学名誉教授
平成 2 年 4 月 学校法人小山学園専門学校東京テクニカルカレッジ理事・校長
平成 7 年 9 月 同上 東京工科専門学校理事・校長
平成 14 年 3 月 同上 退任

叙位・叙勲・受賞

昭和 62 年 2 月 有機合成化学協会賞（学術的）
平成 14 年 4 月 勲三等旭日中綬章
平成 22 年 9 月 正四位（9 月 30 日付）

同窓会・横浜工業会関係

昭和 36 年 4 月 横浜応化会名簿第 1 巻編集担当
昭和 39 年 6 月～横浜応化会常任幹事
昭和 55 年 4 月～横浜応化会副会長
昭和 55 年 5 月 財団法人横浜工業会設立準備委員
昭和 56 年 3 月～財団法人横浜工業会常務理事
平成 2 年 4 月 ～横浜応化会会長

平成 6 年 4 月～財団法人横浜工業会理事長
平成 9 年 6 月 横浜国立大学創立 50 周年記念事業
実施委員会委員
平成 11 年 4 月 横浜国立大学工学部創立 80 周年
記念事業実施委員会委員
平成 12 年 10 月～横浜国立大学同窓会連合初代会長
平成 13 年 4 月～横浜応化会相談役
平成 14 年 3 月 財団法人横浜工業会理事長退任

佐藤菊正先生は横浜市の神奈川にお生まれになり、生涯横浜の中心にお住まい続けた生粋の浜っこでした。上記ご略歴から分かるとおおり、横浜国立大学工学部の前身である横浜高等工業学校を卒業され、東京工業大学、同大学大学院を経て昭和 25 年 5 月に新制大学発足間もない横浜国立大学工学部に助手として着任されました。その後助教授、教授を歴任され、昭和 63 年 4 月から工学部長を務め、平成 2 年 3 月に定年により退官され、名誉教授の称号を授与されました。

この間教育面では、誠実で洞察力のある人柄によって学生及び教職員に慕われ、自由で活発な雰囲気、満ちた学科の伝統を育てるとともに、学部（応用化学科、物質工学科）においては、有機化学、有機合成化学、有機化学実験等を、大学院においては、化学系共通科目である有機合成化学特論を担当し、熱意のこもった講義と、自主性を育む研究指導、及び豊かな学識と真摯な態度によって学生を啓発し、幾多の優れた技術者、研究者を育成されました。また、横浜国立大学としては初めて寄附講座（機能分子設計講座、寄附者＝明治製菓株式会社）の設置に尽力し、教育研究の充実に貢献されました。大学退官後は学校法人小山学園東京工科専門学校理事・校長として学校運営と技術者育成に注力されました。

研究面での業績としては、40 有余年にわたって生理活性物質及び香料物質の合成に関する研究に尽力し、特に化学工業原料を出発物質としてこれらの有用物質を合成するための基礎反応の確立において成果を上げられました。さらに、テルペン系天然有機化合物の生理活性がその立体化学と密接な関係があることに鑑み、三置換オレフィン類の立体選択的合成法の研究に逸早く着手し、数々の新規の高選択的合成法を確立して斯界をリードするとともに、これらの新手法を用いて多数のテルペン系生理活性物質の全合成に成功し、その成果を国内外の学術論文誌に発表して高い評価を得ました。これらの優れた業績により昭和 62 年 2 月には有機合成化学協会賞

を受賞されました。

研究と関連した学会活動については、日本化学会誌編集委員、有機合成化学協会の常任理事、編集理事等を歴任し、日本化学会及び有機合成化学協会の運営と発展に活躍されました。平成 11 年 1 月より日本化学会「香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会」会長として、学会の運営と発展に多大な貢献をしておられました。平成 22 年 12 月までの任期中最後の第 54 回討論会が山梨県甲府市の山梨大学で 1 カ月後に開催されることになっておりましたが、その準備をしておられる最中に急逝され、討論会出席は適いませんでした。無念な胸中察するに余りあります。



香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会
創立 50 周年記念大会において代表挨拶される
佐藤先生（平成 18 年 11 月、横浜）

同窓会・財団法人横浜工業会のこと

佐藤菊正先生は、横浜国立大学のような新制大学が旧制帝大と伍して教育研究を推進するためには大学院博士課程が絶対に必要であり、また卒業生の結束が大学の発展の大きな支えになると考えて、早くからその実現に向けた努力をされました。

昭和 35 年（1960 年）当時、横浜高等工業学校の同窓会である「社団法人横浜工業会」がほぼ休眠状態であったため、新たに学科単位の同窓会を設置する動きが始まり、その基盤として卒業生名簿の作成が行なわれました。昭和 36 年 4 月に佐藤先生の編集（編集委員会組織は不詳）による「横浜応化会名簿第 1 巻」が完成し、同年 6 月に横浜応化会が誕生しました。当時約 2,000 名おられた卒業生の住所・勤務先を突き止め、名簿を編集するのは並大抵の労力ではなかったかと推測されます。これを契機に横浜応化会常任幹事、副会長、会長を歴任し、会長退

任後は相談役として運営の助言に当たっておられました。

佐藤先生はこのような同窓会組織を牽引していくばかりでなく、同窓会の会員が作る卒業年次ごとの同窓会（クラス会）の集まりにも都合がつく限り必ず参加され、大学の発展の様子や同窓生の動静を話して大変歓待されていました。同窓会誌のページをめくると、「佐藤先生をお招きし、母校の様子を伺った……」というクラス会報告をあちこちに見ることができます。

また、昭和 55 年には工学部創立 60 周年記念事業の一環として、工学部・工学研究科を後援することを目的とし、工学部卒業生で運営する「財団法人横浜工業会」の設立基金を募集することになり、設立準備委員として寄附金の募集や制度設計に尽力されました。これを機会に同窓会間の横の連携が深まってきました。そして翌昭和 56 年 3 月に無事「財団法人横浜工業会」が設立され、中川赳初代理事長（当時横浜応化会会長）のもとで常務理事として理事長を補佐し、財団の基盤整備に貢献されました。

横浜工業会はその後横浜国立大学工学部・大学院工学研究科への教育研究援助を順調に実施して進展し、平成 6 年 4 月に佐藤先生は第 3 代理事長に就任されました。佐藤先生は、工業会は単に教育研究支

援機関としてだけでなく、母校発展のために必要ある時は卒業生を結集する役を担うことと卒業生発展の核となることの二つの役割があると考えられ、平成 11 年の横浜国立大学創立 50 周年を祝賀するための記念事業実施委員会が組織されたとき、工学部同窓会を代表して委員に就任し、その具体的な受け皿として「横浜国立大学工学部同窓会共通事業実施委員会」を組織して、当時の工学部 10 学科同窓会長が連携し、工学部各学科同窓会がまとまって行動することになりました。これは現在の「工学部同窓会連合」に引継がれています。

平成 16 年 3 月に、10 年間務められた理事長を退任されてからも財団法人への関心を強く持ち続けられ、平成 19 年に施行された新しい法人制度への対応を視野に入れて、二つの財団の合併を推進されました。小山科学技術研究振興財団（柴田芳明理事長）（吸収消滅法人）と財団法人横浜工業会（存続法人）との合併契約が平成 22 年 7 月 8 日横浜エクセルホテル東急の一室において調印されました。佐藤先生もこの調印式に同席され、これからの発展に大きな期待を持っておられましたが、その様子を見届けることができず、心残りだったことと思います。

文責：井上誠一（昭和 41 年応化卒、
（財）横浜工業会理事長）

佐藤菊正先生と私の出会い

小清水 茂（昭和 19 年 9 月応化卒）

クラスメートの生存者は既に殆んど 87 歳になっている。

今から 70 年前の青春時代を振り返って見ると、第二次世界大戦が勃発した翌年、即ち昭和 17 年 4 月、佐藤先生と私とは同期で、横浜高等工業学校に入学を許可された。当時日本国内にある高等工業学校の 1, 2 位にあった本校に入学できたのは、幸運であった。

一方、神奈川県出身中学校の中で、合格者の多かったのが、横浜第一中学校（通称神中、現在の希望が丘高校）と湘南中学校（現在の湘南高校）の各 4 名であった。数字上は両者張合っているようであるが、歴史と伝統で有名な神中と湘中の差は大きく、神中に追いつけ、追い越せと一生懸命だったのが湘中という図柄であった。神中出身の佐藤先生と、湘中出身の私とは、張合うほどの立場にはなかった。



スマートな容姿の先生は、言葉どおり穏やかな口調で、大勢の級友と親しくしておられた。

戦時統制下のため、ニュースは新聞からのみしか知らされていなかったもので、相変わらず日本軍は奮闘していると思っていた。実際は米軍はすぐ近くまで、ヒタヒタと迫っていたのである。その頃軍人志望の中学の級友で 7 名が戦死を遂げていたし、日々

国内の空気はきびしく、学生生活も1日も揺がせにできない状態であった。先生も私も「教練」の時間など、サボルどころではなかった。

昭和18年には、学期の短縮によって、6カ月間勉強はできなくなった。卒業と同時に先生は工業大学へ、私は昭和電工(株)へと別れ別れになり、連絡は殆んどとれなくなっていた。しかし縁は不思議なもので、十年も経って面会したのが、東京大学工学部応用化学教室へ、先生が訪ねて来て下さったのである。

それと言うのも、私は終戦後昭和電工を失職し、先輩の紹介で、辛うじて就職したのが現在の香料会社であった。それまで香料など無縁ではあったが、会社が東大工学部の応用化学教室の桑田教授の研究室でご指導を受けることができ、私は「香料成分の合成」のテーマで東大で研究していた。佐藤先生は学位を取得されるにつき、発表会に出席してくれと頼まれた。学位を授与された先生は、工大を経て、母校に戻られ、実に多忙な仕事を引受けられて、母校発展に多大な寄与をされてこられた。

私が会社の研究所の幹部に戻った頃、先生も、香

料成分の新規な合成法をテーマに選んでおられた。会社からの依頼で、早速先生をお訪ねして、指導をお願いし、それからしばしば先生の研究室や時にはご自宅へも何回もお訪ねし、ご支援を仰いだ。会社もお陰様で発展し、国内1,2位の規模になってきた。

その後私も転勤をし、研究部門から離れたので、なかなかお会いができなかったが、クラス会には元気でお会いすることができた。

特に心に残る思い出は、会社の研究所の所長になった後輩が、先生と私を食事に招待してくれ、楽しい歓談ができたこと、また久しぶりに大岡川の観桜会で数十年ぶりに散策できたことである。

突然の先生の死は、ただただ驚くばかりであった。先生の温かな語り口は、いつもなつかしく思い出す。ご自身の研究室の伸展はもちろん、各種の学会、委員会などリーダーとしてよくその重責を果された。

70年間のご交際に感謝し、先生のご冥福を心からお祈りするものである。

佐藤菊正先生との思い出

加藤 博 (昭和31年応化卒)

佐藤菊正先生がお亡くなりになられてからもう一年が経ってしまいました。毎年のように佐藤先生とお会いし、お歳を全く感じさせない若々しいご様子をうらやましく思っておりましただけに突然の訃報に大変驚きました。私事になりますが、その前年に佐藤先生と共通の恩師である東工大の大田正樹先生がお亡くなりになり、今年早々には米国エール大学でご指導を頂いた Doering 教授が逝去され、私には先生とお呼びできる方がこの世では一人もいなくなってしまうました。

横浜国大で一年次生を対象にした佐藤先生の有機化学の熱心な講義と新鮮な内容に魅了され、有機化学が私の一生の仕事になりました。一年次と二年次の春休みに先生の実験のお手伝いという名目で研究室におじゃまさせていただきましたが、なにをやっても失敗の連続、お手伝いどころか先生の研究の足を引っ張る結果に終わったのは苦い思い出です。三年次の終わりに卒業研究配属先を決めるときは有機研に希望が殺到し希望者全員が集まって希望理由を述べた上で投票で決定という異常事態に。なんとか



生き残って佐藤先生にご挨拶に伺い、将来もし可能なら大学院に進学して... と相談申し上げたところ先生の恩師でもある東京工大の大田正樹先生の研究室をおすすめ頂き、さらにそれだったら卒業研究もそこでやってみたらどうかとのご示唆を頂きました。当時の工学部はまだ大学院も未設置で私のような学部生一人でも貴重な戦力であったのではないかと思います。ご自分のことよりも学生のためにそこまでお考え頂けることはなかなかできないことです。結局私の卒業研究は実質的に東工大の大田研で行われ、そこでの研究結果は佐藤先生とも連名で私

の初めての研究論文になりました。

東工大在職中に佐藤さんから非常勤講師として国大応用化学科の一年次生に有機化学を教える機会を与えて頂き、よろこんでお受けした後で私は急に信州大学理学部に移ることになり、毎週松本と横浜を往復して講義を続けたのも懐かしい思い出です。さっきうっかり佐藤さんを書いてしまいました。当時佐藤先生は先生と呼ばれるのを嫌われていて、その結果私たちの間ではほかの先生方も含めてさん付けで話すのが当たり前になってしまいました。また私が東工大の大学院生時代に先生は突然長期の療養生活に入られることになり、佐藤先生が一部の執筆を担当されることになっていた化学大事典の代理執筆をさせて頂いたのも今から思えば冷や汗ものです。

私が松本に移ってからも毎年佐藤先生とお会いする機会がありました。これは東工大の大田研究室に関連したことが多かったのですが、先生の恩師に対

する感謝の思いはとても深く、たとえば大田研関連の会の幹事と雑用を大田先生がお亡くなりになるまで一人で続けておられました。大田先生は私にも大恩ある先生ですから機会を見て先生のところにお邪魔するようにしておりましたが、たいていのは佐藤先生からの誘いで一緒させていただくのがほとんどで、待ち合わせをするときもいつも先生が先にお着きになっておられ、こういうことにも先生のお人柄が反映されていると思います。

先生本来のご職業に関係ないことばかり記してしまいましたが、先生は大学での教育・研究・運営や学会でのご活躍はもちろん同窓会関連でも大きな貢献をなされたことは皆様ご承知のとおりです。お食事等をご一緒しながらご苦労話や裏話をお聞かせ頂いたことも多かったのですが、これらに関しては井上先生がおまとめ下さる予定とのことですので、佐藤菊正先生のご冥福を心からお祈りしつつ筆をおきます。

佐藤研 0.5 期生の思い出

鈴木 茂 (昭和 39 年応化卒)

私は学部昭和 39 年卒、大学院 41 年卒で、ちょうど阿部研から佐藤研に移行する狭間に研究室に在籍していました。卒論研究は阿部研で(最終生)、修論は佐藤研(一期)として卒業させていただいたと記憶していましたが、今回名簿をよく見てみると修士終了時でもまだ阿部研であることが分かりました。この時期はすでに、研究室の運営は実質的に佐藤先生に任せられており、私の同期とその前後はなんとなく佐藤研出身のつもりでいる人が多いようで、佐藤研 0.5 期生とでも呼べましようか。そんな立場から佐藤先生と研究室の思い出を振り返り、先生への追悼とさせていただきたく思います。

研究室はかなりの大所帯でした。阿部、佐藤、宮本、栗原諸先生、卒論生(私の期は 9 名)、研究助手の浜島さん、山本さん、企業からの派遣の甘粕さんと板倉さんなど皆懐かしい方々です。大学院ができると更に増え 20 名を優に超える陣容となり、弘明寺の実験室にひしめいていました。阿部先生は大御所として控えており、佐藤先生が研究をはじめ研究室運営の諸事万端を支えておられました。大番頭ではありますが、周囲には大変気を使われ、我々卒論生にも丁寧に接して下さったのが印象的でした。研究テーマは天然物の合成がメインで、トコ

フェロールなどビタミン類、シクロテンなど各種香料の合成が卒論や修論に割り当てられていました。その後佐藤先生が功績をあげられた生理活性物質研究への流れが、既にできかけていたのではないかと思います。先生は普段は優しい半面、研究では大変厳しく、例えば、仮説どおりに合成が進まない場合にもどのような反応が起きているか、その原因は何かなどを究明するよう強く求められ、あくまでもサイエンスに基づく研究を指導されました。研究室のレベルは JOC (Journal of Organic Chemistry) に掲載されるレベルには達したが、これからは JACS (Journal of American Chemical Society) にも掲載されるレベルを目指すとして常々仰っており、このような高い目標で我々をご指導くださったことをいまでも感謝しています。

我々の佐藤先生に対する印象として、研究においても日常においてもあまり急進的な考え方をなさらず、新しいものには比較的用心深く接していると感じていました。しかし、次の二つのエピソードから私のこの印象はがらりと変えられたのを思い出します。ひとつは阿部研一期後輩の時田澄男さん(埼玉大 名誉教授)から聞いた話です。彼が大学一年で受けた有機化学の講義は佐藤先生が担当され(私の

時は阿部先生), その中で量子有機化学の講義をされました。レベルが高い上に非常に分かりやすく, 素晴らしい講義であったそうです。彼はそれに触発され, 量子有機化学を基礎に置いた, その後の研究人生の方向性が固まったということでした。もうひとつは, 私が修士一年の時に自動車の運転免許を取った際, 大学院同期の水野君(自動車部 OB)を先生に那須へドライブしましたが, どう興味を持たれたのか佐藤先生が同行されました。不思議に思っていました, その後ほどなく先生は車を買われて, 通勤にも使われるようになったとのことでした。当時, 私には量子有機化学も車の運転もどうしても佐藤先生とは結びつきませんでした, 後から考えると, 先生は新しいことについても常にしっかりと自分の判断基準に基づいた取捨選択されており, その科学者らしい態度に感心させられました。当時の研究室の様子を伝えるのに書き残したいエピソードは山ほどあります。しかし, 0.5期生のあまりにもローカルな話になるので差し控えましょう。

振り返れば, 0.5期生も卒業から半世紀近くが経ってしまいました。大半は現役を引退しています。佐藤先生は我々とは10歳以下の年の差で兄貴のような近親感があります。青春の真ただ中, 先生, 学生との関係というよりもむしろ家族のように育てていただきました。そこで学問を通じ, 大切な人生の基礎を教え込んでいただいたというのが, 0.5期生共通の思いであります。ご指導いただいた私の研究は先生と連名でJOCに掲載することができました。佐藤先生の叙勲の祝賀会では司会役を仰せつかり, わずかでも恩返しことができましたでしょうか。すでに阿部先生, 栗原先生, 宮本先生がこの世になく, 昨年ついに佐藤先生も亡くなってしまわれたのは痛恨の極みです。佐藤先生の生涯を振り返るのは我々自身の生涯を振り返るのに通じています。我々にとっても本当に貴重な一時代が過ぎ去ったことを痛感させられます。改めて佐藤先生に深甚の感謝を申し上げるとともに, 心からご冥福をお祈りいたします。

佐藤菊正先生の思い出

井上 誠一 (昭和41年応化卒)

出会い

昭和37年4月応用化学科に入学して, 清水ヶ丘キャンパスにおいて一般教育が始まったとき, 有機化学の講義を担当されたのが佐藤先生でした。中学時代は数学パズルに凝り, 高等学校では生物にのめり込んでいて, 化学は得意ではありませんでした。中でも有機化学は数学的なデジタルな扱いではなくアナログの感覚になじめませんでした, 佐藤先生の講義を聴いてから, 有機化学の面白さに目覚めました。卒業研究では阿部滋弘研究室に入ることができ(当時人気の研究室はくじ引きで配属を決めた), 佐藤先生のテーマである α -トコフェロール(ビタミンE)の合成研究の一端を担当することになりました。大学院では阿部研の後を継がれた佐藤菊正研究室で引き続きテルペン類の合成研究を続けることができ, これが私の生涯の研究テーマの出発点となりました。非常に厳しい研究姿勢の中にも温かい思いやりでご指導を受けたことは大変有難いことでした。

有機合成化学協会賞受賞のお祝い

昭和62年2月17日に佐藤先生は昭和61年度有



機合成化学協会賞(学術的)を受賞されました。それまで長年にわたり続けてこられたテルペン類を中心とする天然物の合成に関するもので「有用な天然有機化合物の立体選択的合成に関する研究」に対する業績が評価されました。

そこで早速同窓会関係者と門下生25人が発起人となり, 平成62年3月14日にKKR東京竹橋(竹橋会館)において祝賀会が開催されました。これには学会関係者, 同窓会, 門下生など200名近くが集まり, 佐藤先生ご夫妻は大変お喜びの様子でした。



有機合成化学協会賞の受賞祝賀会にて
佐藤先生ご夫妻（昭和 62 年 3 月，竹橋会館）

叙勲受章祝賀会

佐藤先生は大学を定年退官の後，小山区園の理事・校長を平成 14 年 3 月まで務められました。そしてこの年の春の叙勲において勲三等旭日中綬章の

叙勲の榮に浴されました。そこで大学，小山区園，同窓会連合，財団法人横浜工業会，横浜応化会，門下生の方々に呼びかけて，平成 14 年 9 月 7 日に横浜ベイシェラトンホテルにおいて盛大な祝賀会が行われました。出席者は約 230 名で，叙勲受章をお祝いする会であることはもちろんでしたが，横浜国立大学 40 年，小山区園 12 年の教育社会貢献に対する労いの会ともなり，先生ご夫妻は終始にこやかに過ごしておられたのが印象的でした。

藤研会（門下生の会）として集うことに先生は比較的遠慮勝ちで，次は米寿のお祝いが候補に挙がっていましたが，実現できませんでした。残念な限りです。

大学教育，研究，専門学校，学会活動，同窓会活動，財団法人運営と，休むことなく走り続けてこられた先生の足跡はいろいろなことを人に語りかけています。後は先生の薫陶を受けた人たちによって受け継がれていくと思いますので，どうぞ安らかにお休み下さい。

合掌

故 佐藤菊正先生追悼の辞

村井 安（昭和 50 年応化卒）

月日のながれは早く，佐藤菊正先生がご逝去されて早 10 カ月が経過しました。私にとって先生は学問の師，人生の師であると同時に，厳しさと優しさを持った父親のような存在でした。

先生との出会いは，今から 37 年前大学 4 年の卒業研究で，有機合成化学の専門家である先生の研究室に配属されたときからです。その後，修士課程で 2 年間引き続き有機合成化学の研究指導を受け，先生の推薦で明治製菓株式会社（現 Meiji Seika ファルマ株式会社）へ就職をさせていただきました。当時は石油ショックの後で，（最近の就職環境と同じように）厳しい就職戦線の中での就職でした。また，結婚につきましても先生に仲人になって頂きましたが，結婚相手は先生と同級生のお嬢さんであり，相手の紹介から結婚まで面倒を見ていただきました。さらに，学位（博士号）については，（当時の）明治製菓株式会社が横浜国立大学工学部に寄附講座を設置したときに，博士課程後期の学生として 3 年間の出張研究に推薦していただき，無事に学位



を取得することができました。

先生の有機合成化学の研究に対する考え方は，単純に反応を行うだけでなく，必ず再現性を確認することと，必ず一定量の原料を用いて反応を行った後目的物を単離し，得られた生成物の分析と収率を確認することでありました。また，文献調査の仕方も研究室配属後直ぐに直接指導していただきました。また，文献をよく読んで，自分が行っている実験が世の中でどのような位置にあるのか，さらには，他の研究者に対して負けないように数多くの実験を行うことも指導を受けました。学生時代は，なんと

く理解したように思って合成研究を行っていましたが、企業に入り実践的な有機合成化学の研究を行うようになって、初めて先生の考え方の本当の意味が理解できるようになりました。

また、学生時代に先生からただ一度しかられたこ

とがありましたが、それは、実験結果の記載（説明）の仕方でありました。多くの実質的なご指導を受け、先生の教えは、尊い教訓として、現在も私の胸裡に深く刻まれております。どうか、先生の御霊の安らかならんことを。